

東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（七）

— 学校・教育機関の蔵書印 —

中善寺 慎

凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
- ・ 印の大きさも色調も原本を再現できなかった。
- ・ 代わりに印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
- ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に*印を付した。
- ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
- ・ 学校・教育機関の沿革などは次の資料に依った。

井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』

国立国会図書館篇 『人と蔵書と蔵書印』

日本近代教育史事典編集委員会編 『日本近代教育史事典』

・配列は、学校・教育機関のよみの五十音順とした。



岩手県立一関中学校

岩手県で二番目に開校した県立中学校。明治三十一年（一八九八）岩手県一関尋常中学校として創立。明治三十四年（一九〇一）県立一関中学校と改称。昭和二十三年（一九四八）学制改革により県立一関第一高等学校となる。北上盆地南端の中核都市である一関は、天和二年（一六八二）以降、田村藩の城下町として発展した。廃藩置県後の一関県（のち磐井県）時代には県庁所在地であった。

「岩手県立一関中学校」（60）

*柳菴雑筆（II-1-E-1-103）

新編鎌倉志（XI-5-C-75）

大津師範学校

明治期の滋賀県大津に置かれた教員養成教育機関。明治八年（一八七五）設置の小学校教員伝習所（同年滋賀県師範学校と改称）を前身とする。翌年滋賀県大津師範学校と改称し、明治十三年（一八八〇）ふたたび滋賀県師範学校の校名に復するまで、この名称が用いられた。書籍縦覧所は、明治十一年（一八七八）開設、翌年本校の附属施設となるが、明治二十年（一八八七）に廃せられた。昭和二十四年（一九四九）滋賀県師範学校は彦根経済専門学校、滋賀青年師範学校と合同して、滋賀大学に昇格した。

「消印滋賀県尋常師範学校」（43）

三代実録（X15-D117）

「大津師範学校書籍縦覧所蔵書之印」（45）

三代実録（X15-D117）





岡藩校

豊後国岡藩中川家の藩校。享保十一年（一七二六）岡藩主中川久通によって竹田村袖谷に設けられた輔仁堂を、安永五年（一七七六）藩主久貞が藩直轄として拡張、由学館と称した。天明六年（一七八六）新たに武館を城下鷹匠町に設け経武館と称し、藩士の子弟は文館・武館のいずれかに入学することが義務づけられた。天保三年（一八三二）藩主久教は由学館を七里に移し拡張、角田九華を教授に登用して学制の刷新を行なった。明治元年（一八六八）文武両館は合併して修道館と改称する。

「由学館」（32）

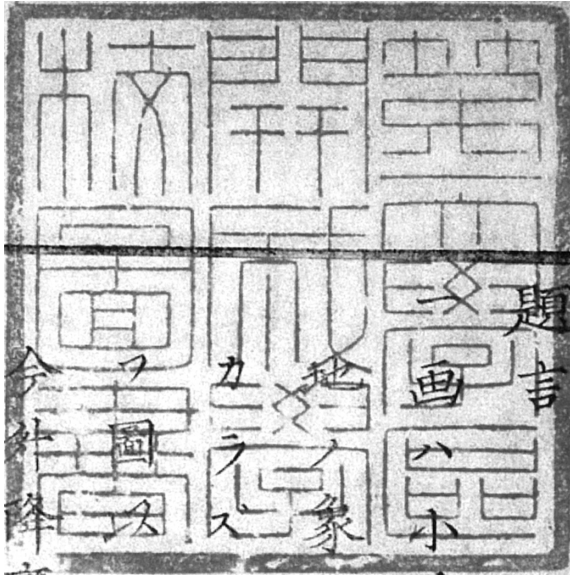
王氏書画苑（Ⅲ―九―B―一六六）

開成学校

明治初期の官立洋学教育機関。東京大学の源流のひとつ。開成学校の名は学校制度の変遷に伴う目まぐるしい名称変更のため前後二期に分かれる。幕府設立の開成所（蕃書調所の後身）の名を改めた開成学校（前期開成学校）は、大学南校、南校、第一大学区第一番中学と改称され、さらに明治六年（一八七三）再び開成学校（後期開成学校）と名称を改めた。この年に神田錦町の新校舎へ移転。法学・理学・工学・文学系の専門学を授ける学校で、南校時代の貢進生が多く、ほとんどが士族であったようである。雲村文庫の和田維四郎も開成学校に鉱物学を学んでいる。明治七年（一八七四）東京開成学校と改称、明治十年（一八七七）東京医学校と合併して東京大学となる。

「第一大学区開成学校図書」（75）

図画正誤（XV-31B1d16）





開成所

幕末期に設けられた江戸幕府の洋学教育機関。蕃書調所の後身。文久三年（一八六三）洋書調所を改称したもの。神田一ツ橋の外護持院原に所在。教育関係機関の統合過程の中で学問所の附属とされ官立学校の系統に含められるようになった。明治元年（一八六八）明治政府の管轄下に移る。維新に際しては、静岡学問所や沼津兵学校に職を転ずる教官も多かった。明治二年（一八六九）大学校に吸収されその一部となり、名称を開成学校と改めた。

「開成所刊行」（58）

改正増補英和对訳袖珍辞書（XVII—二二C—一〇）

笠間藩校

常陸国笠間藩牧野家の藩校。文化十四年（一八一七）藩主牧野貞喜が藩政改革の一環として城下桜町に藩校時習館を創設、また講武館を設けた。文政六年（一八二三）医学所博采館の設置は、医学教授のほかに薬草を栽培し内外物を収集させるなど、藩主貞幹の本草学への関心をうかがわせる。この時期に藩校の規模が拡大・整備された。安政六年（一八五九）藩主貞直は時習館を城下中央大和田に移し、また講武・博采両館を時習館内に統合して藩校教育の振興を図った。明治三年（一八七〇）には藩学寮（本校）と小学校との二部に学制が改められる。

〔笠間文庫〕（73）

大清三朝事略（E11221・〇六ムラ〇一〇〇一）



桑名藩校

伊勢国桑名藩松平家の藩校。寛永十二年（一六三五）桑名藩主となった松平定綱が開設した学問所を起源とする。その後松平家は、越後高田ついで奥州白河に移封。寛政三年（一七九一）白河藩主松平定信が、従来の学問所を白河会津町に拡張して立教館と称した。文政六年（一八二三）藩主定永の桑名転封に伴い、立教館は桑名伊賀町に移る。明治三年（一八七〇）吉ノ丸に改築拡張したが、翌年廢藩となり間もなく閉校した。江戸八丁堀の藩邸内にも学校が設けられていた。旧蔵書の一部は内閣文庫や国立国会図書館に収蔵されている。掲出書には「桑名文庫」印が併せ押されている。

「立教館図書印」(36) *江談抄(II-1-E-1082)

求言録(VI-16-38)

論語集解(1-C-41)



高知藩校

土佐国高知藩の藩校。藩主山内豊敷は、享保十七年（一七三二）藩士子弟の教育のために高知北会所に会所講を創め、ついで宝暦十年（一七六〇）土佐郡追手筋に藩校を創設し教授館と称した。天保三年（一八三二）教授館内に特設された医学科は、天保十四年（一八四三）帯屋町に移され医学館（弘化二年沢流館と改称）となる。弘化三年（一八四六）には武芸所が新設され、教授館は次第に活発さを失う。文久二年（一八六二）藩主豊範は教授館を廃し、城下西弘小路に文武館（慶応元年致道館と改称）を設立する。慶応二年（一八六六）には洋学校開成館を九反田に設立し西洋各国の学術を教授させた。致道館は明治五年（一八七二）閉校。旧蔵書は高知県立中央図書館に受け継がれるが昭和二十年（一九四五）の戦災で焼失という。

「教授館図書」(59)

Nederlandsch-japaneesch woordenboek

(XVII—111C—118)



佐伯藩校

豊後国佐伯藩毛利家の藩校。佐伯藩の藩校は、宝永元年（一七〇四）藩主毛利高慶の学習所設立に始まる。安永六年（一七七七）藩主高標は城内鶴谷に学舎を新築して四教堂と称した。のち四教堂に隣接して武芸稽古場が設けられ藩士の子弟は文武の兼修が義務づけられた。明治四年（一八七一）廃藩とともに閉校した。毛利高標は愛書家としても知られる。蒐めた蔵書は八万冊に及び佐伯文庫と称した。掲出書には「佐伯文庫」印も併捺されている。

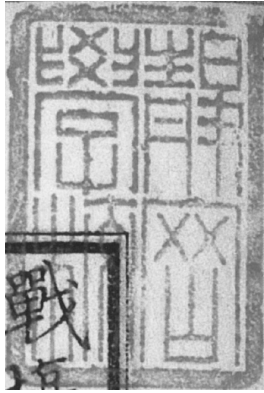
「四教堂蔵」（63）

五百家注音弁昌黎先生文集（三―A―一―一）



静岡学問所

駿河国静岡藩徳川家の藩校。安政元年（一八五四）駿府に設立された駿府学問所を前身とする。文久元年（一八六一）明新館と改称して慶応四年（一八六八）まで存続。その後を受けて明治元年府中学問所として開設した。徳川家の駿府移封に従うように、江戸の開成所や昌平坂学問所、横浜の仏蘭西語学伝習所の教授や蔵書の一部が移っている。翌年府中が静岡と改称されると静岡学問所と称した。学頭は向山黄村。明治五年（一八七二）学制頒布に伴い閉校。旧蔵書の多くは、静岡県立図書館内の葵文庫に収められている。



〔静岡学校〕（50）

戦場百箇条（XVI—1—C—4）

彰考館

常陸国水戸藩の修史局。明暦三年（一六五七）『大日本史』編纂のため江戸神田の別邸（のち駒込）に置かれた編纂局に始まる。徳川光圀は藩主就任後の寛文十二年（一六七二）これを小石川の本邸内に移し彰考館と命名。修史事業のほか、藩士の教育も行なっていた。貞享三年（一六八六）以後は水戸城内二の丸に彰考館別館が設けられ、元禄十五年（一七〇二）以後は江戸と水戸双方で業務を分担していた。明治四年（一八七一）廃藩となると修史事業は水戸徳川家が継承し、明治三十九年（一九〇六）の『大日本史』完成により修史局としての使命を終える。水戸にあった蔵書七万冊の多くは昭和二十年（一九四五）の空襲で焼失するが、戦災を免れた資料が水府明徳会彰考館に存する。

〔彰考館〕（53）

吉原大全（XI—五—C—四四）





昌平坂學問所

江戸幕府の教育機関。正式には學問所。昌平齋と称された。寛永七年（一六三〇）上野忍岡に賜給された別屋敷に林家の私塾が建てられたのに始まる。元禄三年（一六九〇）將軍綱吉により神田湯島に移転。この時林羅山、鷲峰父子蒐集の書籍が移管された。寛政九年（一七九七）には幕府直臣の子弟の教育を主な目的とする幕府直轄の學問所となる。文化元年（一八〇四）大坂の木村兼葎堂の旧藏書、文化五年（一八〇八）近江仁正寺藩主市橋長昭収集の宋元版が獻納され藏書が充実した。また、文化文政期（一八〇四—一八三〇）には學問所内に御実紀・地誌・沿革の三史局が開設され、その編集資料としても多くの書籍が集められた。幕末期には医学所、蕃書調所とともに幕府の教育施設として全国でも規模を誇るものであった。維新により接収され昌平学校と改称し明治二年（一八六九）再開。さらに大学と名を改めるが学制改革のため休校となり自然閉校となった。旧藏書の大半は内閣文庫に架蔵される。

〔御書物方〕（47） 金葉和歌集（三丁F一aへ一五〇）

〔昌平坂學問所〕（46）

集千家註批点杜工部詩集（二丁B一d一二二）

〔編脩地志備用典籍〕（72）

駿河國興津江尻巡村記（XI一五C一二七）

昭和小学校

東京都文京区にある公立小学校。昭和四年（一九二九）旧本郷区の最も新しい尋常小学校として開校。昭和十六年（一九四一）東京市昭和国民学校と改称。昭和十九年（一九四四）栃木県馬頭町ほか二村に学童疎開。昭和二十二年（一九四七）区立昭和小学校となる。掲出書は昭和三十七年（一九六二）東洋文庫に寄贈されたものである。

「東京市昭和尋常小学校印」（27）



書経集註（I―三―八〇七）

書伝輯録纂註（I―三―八〇九）

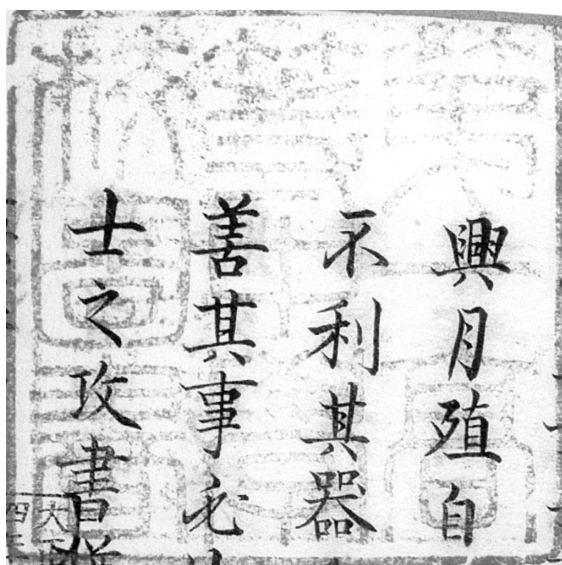
*春秋左氏伝校本（I―六―B―八一八）

春秋左伝（I―六―B―八一九）

孝経大義詳解（I―七―八〇八）

四書正解（I―八―A―八〇九）

増補元明史略（X―六―B―c―一〇〇七）

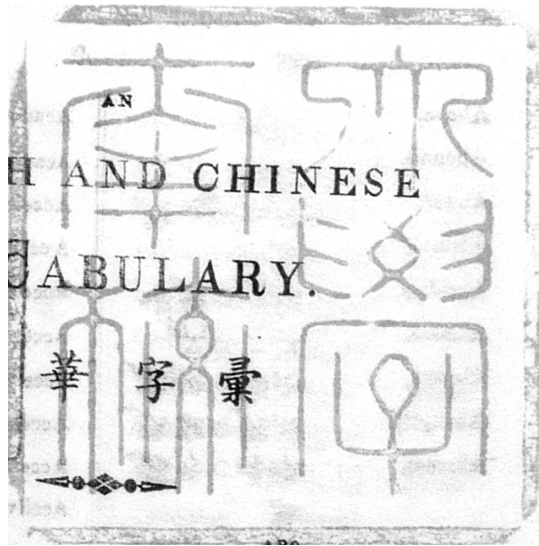


第一高等中学校

帝国大学の予備教育機関。前身は明治十年（一八七七）に文部省直轄東京英語学校と東京開成学校普通科を併せて成立した東京大学予備門である。明治十九年（一八八六）の中学校令により東京大学から分離し、第一高等中学校となる。明治二十年（一八八七）千葉に医学部を設置。明治二十二年（一八八九）には東京本郷向ヶ丘に移転。明治二十七年（一八九四）高等学校令の公布により第一高等学校と改称された。第一高等学校は昭和二十四年（一九四九）東京大学に吸収されその教養学部となった。

「第一高等中学校図書」（75）

英華字彙（Ⅷ一〇一〇二八）



大学南校

明治初期の官立洋学教育機関。神田一ツ橋に位置していた。現在の東京大学の源流のひとつ。明治二年（一八六九）政府は昌平学校（昌平坂学問所）を大学と改め、開成学校（開成所）と医学校（医学所）の二校を分局として統合した。この時に開成学校を大学南校、医学所を大学東校と称した。大学南校は講習所・伝習所・数学所（局）によって構成され、また、翻訳局が設けられ蕃書調所時代からの任務である洋書の翻訳出版事業が引継がれた。翌明治三年（一八七〇）各藩の派遣する英才を受入れる貢進生制度が実施され人材養成機関としての役割も明確になった。明治四年（一八七一）七月大学の廃止により南校と改称、新たに設立された文部省の所管となる。九月には学制改革実現のため閉校となり、翻訳局は文部省編輯寮に移管、貢進生制度も廃止された。翌月再開校した後は、第一大学区第一番中学、東京開成学校などと名称を改め、明治十年（一八七七）東京大学となった。

「大学南校」（71）

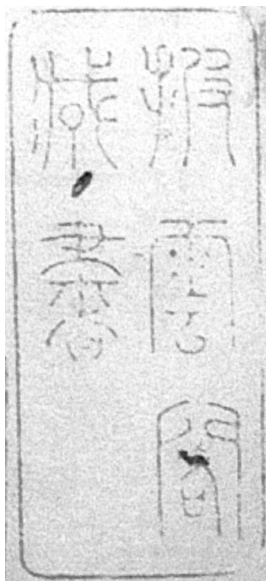
英華字彙（Ⅷ―一〇一―一〇二八）

高松藩校

讃岐国高松藩松平家の藩校。元禄十五年（一七〇二）藩主松平頼常が城下中野天満宮南に藩校講堂を設置した。享保年間（一七一六―一七三五）に一時廃されるが、元文二年（一七三七）に復興。安永八年（一七七九）藩主頼真が天満宮北に藩校講道館を創設、総裁に後藤芝山を起用した。天保三年（一八三二）藩主頼恕は城内に史局考信閣を設け編纂事業を進めた。慶応元年（一八六五）には講道館中に洋学校・皇学校が設置されている。藩校は廃藩後に廃止され、香川県歴史博物館に旧蔵書若干が残る。披雲閣は、城内三ノ丸にあった藩主居館の名である。

〔披雲閣蔵書〕（74）

春雨抄（Ⅷ四A一二九）





田中藩校

駿河国田中藩本多家の藩校。天保五年（一八三四）藩主正寛により学問所と稽古所が設けられ、天保八年（一八三七）田中城大手門内に日知館が創設された。当初、日知館では武道に重点がおかれ、水戸の弘道館と並び称せられた。万延元年（一八六〇）には芳野金陵の建言により江戸藩邸にも日知館が置かれる。慶応四年（一八六八）本多正訥が安房長尾に転封、藩校日知館も明治二年（一八六九）長尾に移った。

「日知館文庫印」（30）

京都將軍家所領役考（XII 三一D―d―五八）

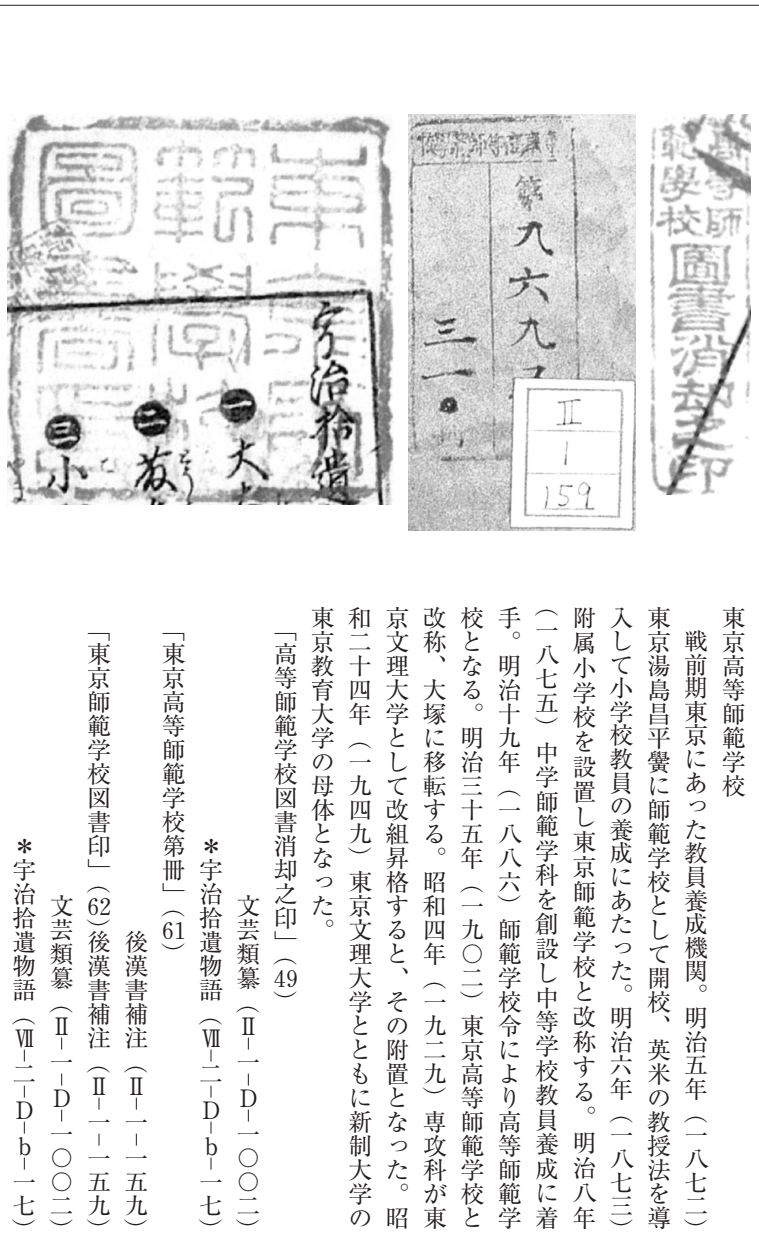
津和野藩校

石見国津和野藩亀井家の藩校。天明六年（一七八六）藩主亀井矩賢により津和野町後田に設けられ、養老館と名付けられた。弘化四年（一八四七）藩主茲監が藩学の拡張強化を図り、養老館に武道教場を増設し文武教育の完成をみる。嘉永二年（一八四九）さらに拡張。のち殿町に移る。明治四年（一八七一）廃藩により閉校となる。旧蔵書は津和野郷土館に収蔵されている。



「津和野文庫」(55)

史記正義(三―A―h―1―13)



東京高等師範学校

戦前期東京にあった教員養成機関。明治五年（一八七二）東京湯島昌平巒に師範学校として開校、英米の教授法を導入して小学校教員の養成にあたった。明治六年（一八七三）附属小学校を設置し東京師範学校と改称する。明治八年（一八七五）中学師範学科を創設し中等学校教員養成に着手。明治十九年（一八八六）師範学校令により高等師範学校となる。明治三十五年（一九〇二）東京高等師範学校と改称、大塚に移転する。昭和四年（一九二九）専攻科が東京文理大学として改組昇格すると、その附置となった。昭和二十四年（一九四九）東京文理大学とともに新制大学の東京教育大学の母体となった。

「高等師範学校図書消却之印」(49)

文芸類纂(Ⅱ-Ⅰ-D-1002)

* 宇治拾遺物語(Ⅶ-1-D-b-17)

「東京高等師範学校第冊」(61)

後漢書補注(Ⅱ-1-159)

「東京師範学校図書印」(62)後漢書補注(Ⅱ-1-159)

文芸類纂(Ⅱ-1-D-1002)

* 宇治拾遺物語(Ⅶ-1-D-b-17)

東京帝国大学

明治初年設立の大学校を淵源とする国の高等教育機関。紆余曲折を経て、明治十年（一八七七）文部省は東京開成学校と東京医学校を併合して東京大学を創設する。明治十九年（一八八六）帝国大学令により東京大学は帝国大学と改称され、明治三十年（一八九七）京都帝国大学の設立を機に東京帝国大学と名称を改めた。附属図書館の源流は、東京開成学校の書籍縦覧室（明治七年設置）、東京医学校の図書展覧室（明治九年設置）に遡る。大正十二年（一九二三）の関東大震災では附属図書館蔵書が灰燼に帰したほか、白山黒水文庫など学内蔵書七十五万冊を失っている。第二次世界大戦後、昭和二十二年（一九四七）大学名を再び明治初年の東京大学と改称し、昭和二十四年（一九四九）新制国立大学に転換した。

「東京帝国大学図書印」（82）

地理志（VI―一七五）



名古屋藩校

尾張国名古屋藩徳川家の藩校。寛延元年（一七四八）に蟹養斎が藩の許可を得て巾下埋門外に学館を創設、明倫堂と称した。天明三年（一七八三）藩主徳川宗睦は庶政刷新の一環として片端長島町に学校を開設し明倫堂を再興した。初代総裁に細井平洲を起用した。天明五年（一七八五）東隣地に移転。出版事業にも意を用い、『群書治要』などの漢籍刊行はよく知られる。明治二年（一八六九）職制改正により明倫堂の号を廃して単に学校とのみ称するに至った。明治四年（一八七一）廃藩に際して閉校となる。旧蔵書は愛知教育大学、蓬左文庫、国立国会図書館に収蔵されている。

「明倫堂図書」（55） 周南先生文集（Ⅶ―四―B―二二八）

新潟第一師範学校

第二次世界大戦下新潟県の教員養成機関。明治八年（一八七五）設立の乙組小学講習所を前身とする。講習所は明治十年（一八七七）新潟県師範校と改称、さらに県立新潟学校に合併しその師範学科となった。明治十九年（一八八六）師範学科は独立して新潟県尋常師範学校となる。新潟県師範学校（明治三十年）、新潟県第一師範学校（明治三十二年）、新潟県新潟師範学校（明治三十四年）と変遷の後、昭和十八年（一九四三）戦時政策の一環で官立専門学校に改編され新潟第一師範学校となる。女子部の淵源は、明治十二年（一八七九）県立新潟学校に設置された女子師範学科に始まる。明治三十三年（一九〇〇）長岡女子師範学校の創設に伴い廃止されるまで女子部として変遷をともし、昭和十八年に新潟第一師範学校が長岡女子師範学校を吸収、再びその女子部となる。第二次世界大戦後、新潟第一師範学校は新制新潟大学の教育学部本校となった。

〔新潟第一師範学校女子部報国図書印〕（30）

上海史話（四五二八）





日本大学

東京都千代田区九段南に本部を置く私立大学。明治二十二年（一八八九）司法大臣の山田顕義が開設した日本法律学校を起源とする。翌明治二十三年（一八九〇）皇典講究所（国学院大学の前身）内に開学。明治二十九年（一八九六）神田三崎町に移転。明治三十四年（一九〇一）高等師範部を置き、明治三十六年（一九〇三）日本大学と改称した。大正九年（一九二〇）大学令による大学となった。この間、組織を拡大して総合大学への道を歩み、昭和二十四年（一九四九）新制大学に移行する。大学図書館は昭和十一年（一九三六）開館。

〔日本大学図書館蔵書〕（36）

御定駢字類編（Ⅲ一五一一九）

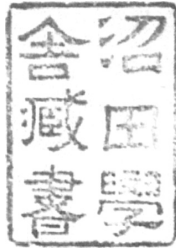
沼津兵学校

明治初期、静岡藩徳川家が開いた陸軍将校養成機関。明治維新に際し沼津に移住した旧幕臣により明治二年（一八六九）沼津城内に徳川家兵学校が開校された。この時に江戸の開成所などが所蔵していた書籍の多くが兵学校に移されている。翌年沼津兵学校と改称、このときに同校の予備機関として附属小学校が設けられたが、これは近代的な小学校の先駆として知られる。廃藩置県後は政府所管とされ兵部省に移管、陸軍兵学寮の分校となる。明治五年（一八七二）東京の兵学寮に合併吸収され閉校となった。当初、陸軍頭取の管理下に置かれ、教授には頭取として西周が就任するなど当時の第一級の学者・技術者が充てられた。特に数学教育については当時の最高水準を誇る。旧蔵書の一部は沼津市立駿河図書館に沼津文庫として現存する。

「沼津学校」(39)

A tonic dictionary of the Chinese language in the Canton dialect (III-111-D-a-18)





沼田藩校

上野国沼田藩土岐家の藩校。寛保二年（一七四二）駿河国田中から入封の藩主土岐頼稔が城内に学問所を設け、沼田学舎が発足する。以後の推移は詳らかではない。弘化元年（一八四四）藩主頼寧が江戸麻布見坂邸内に設けた学問所は、文久元年（一八六一）藩主頼之の時に沼田学舎分校敬修堂と改称している。嘉永四年（一八五二）学問所を増設。明治元年（一八六八）に廃止され、私塾となる。

〔沼田学舎藏書〕（32）米菴藏筆譜（IX―四―C―一―五八）



彦根藩校

近江国彦根藩井伊家の藩校。寛政十一年（一七九九）藩主井伊直中が稽古館を設立。天保元年（一八三〇）藩主直亮は、名称を弘道館に改める。文久二年（一八六二）一時閉鎖。文武館（明治二年）、学館（明治三年）、さらに学校と改称され、明治五年（一八七二）閉校。藩校の流れを汲む彦根中学校は、名称変更ののち昭和二十三年（一九四八）彦根東高等学校となる。旧蔵書は、滋賀大学教育学部図書館、彦根東高等学校、彦根市立図書館などに分散している。

「彦根藩学校蔵書」（60） 三代実録（X15-D117）

豊山大学

明治大正期の真言宗豊山派の私立大学。明治二十年（一八八七）真言宗新義派大学林として設立される。明治四十一年（一九〇八）豊山大学と改称。初代学長は権田雷斧。大正十三年（一九二四）仏教連合による財団法人仏教教育財団が設立され、天台宗大学（明治十八年設立）、浄土宗宗教大学（明治二十年設立）とともに仏教連合大学となる。大正十五年（一九二六）大学令により設立された大正大学の前身である。

「豊山大学図書之印章」（46）

皇朝経世文編（XII—三—一〇〇二）



三菱商業学校

明治前期の私立専門学校。明治十一年（一八七八）三菱社員の子弟を教育する目的で設立された。岩崎家の物質的援助のもと、豊川良平の主宰により開校する。まもなく神田錦町三丁目の旧旗本屋敷跡に移る。教員の支援を慶応義塾に仰いでおり、商法講習所と慶応義塾とを折衷した学校であった。時宜に適さず明治十四年（一八八一）閉校となる。校舎や学生は、同じく豊川良平によって開かれた明治義塾を経て英吉利法律学校（明治十八年創立。中央大学の前身）に継承された。岩崎久弥も三菱商業学校に学んでいる。

「三菱商業学校書籍貸渡之印」（31）

春秋左氏伝校本（I-161B-181-0）

「三菱商業学校蔵書」（31）

春秋左氏伝校本（I-161B-181-0）





水口藩校

近江国水口藩加藤家の藩校。安政二年（一八五五）藩主加藤明軌が、震災で倒壊した各所の諸芸稽古所を統合し、藩邸内に翼輪堂を開設。儒者中村栗園らの教授のもと藩士の子弟に教育した。明治元年（一八六八）には藩外への留学制度を設ける。明治四年（一八七一）講武局を併合して尚志館と改称した。廃藩とともに閉校。旧蔵書の現存状態は不明。

「翼輪堂蔵書記」（55）

羅念庵集（IV―TE―四）

山梨県尋常中学校

山梨県甲府市の県立中学校。寛政年間に甲府城内に設けられた学問所徽典館に起源を持つ。徽典館は明治六年（一八七三）開智学校と改称し、その後師範講習学校となるが、明治十三年（一八八〇）その師範学校内に山梨中学として開設される。明治十五年（一八八二）県立の徽典館に名称を改めた後、明治二十年（一八八七）尋常中学となる。明治三十九年（一九〇六）県立甲府中学校となり、昭和三年（一九二八）甲府市美咲に移転。昭和二十年（一九四五）戦災で半ばを焼失する。昭和二十三年（一九四八）甲府第一高等学校となる。山梨県尋常中学校時代の明治三十年（二八九七）幣原坦が校長に就任している。農事講習所は明治十五年の創立。明治十七年山梨農学校と改称後、明治十九年に県立徽典館に合併しているが、尋常中学の発足時に廃止された。

「山梨県尋常中学校印」（35）



陸軍所

江戸時代末期に幕府が設けた武術修練機関。開国前後の情勢緊迫化を背景に安政三年（一八五六）設置された講武所の後身。文久二年（一八六二）以降、幕府は洋式軍隊の建設をめざし軍制改革を断行、慶応二年（一八六六）常盤橋門内に陸軍奉行の管下の陸軍所を設置する。ここに講武所の砲術部門を移管し、西ノ丸下厩を撤兵屯所、新橋厩を遊撃隊屯所とし、また騎兵方をして雉子橋・神田橋の厩を管理させた。さらに慶応三年（一八六七）陸軍所内にフランス陸軍教官による三兵士官学校を設け越中島と駒場野を練兵場に充てた。明治元年（一八六八）江戸開城により消滅した。

「陸軍所」(63)

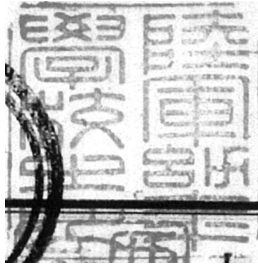
A tonic dictionary of the Chinese language in the Canton
dialect (III—111—D—118)



陸軍幼年学校

陸軍の将校生徒になるために必要な素養を与える教育機関。明治三年（一八七〇）大阪兵学寮に横浜仏蘭西語学伝習所を合併して幼年学舎を設けた。明治五年（一八七二）陸軍兵学寮幼年学校に改組、明治八年（一八七五）陸軍幼年学校として兵学寮から分離独立し、陸軍省の管轄下に入る。明治十年（一八七七）陸軍士官学校に合併されたが、明治二十年（一八八七）再び独立した。明治三十年（一九〇九七）陸軍中央幼年学校に改編、大正九年（一九二〇）陸軍士官学校予科となる。明治三十年に仙台・名古屋・大阪・広島・熊本に設置された陸軍地方幼年学校は、大正十一年（一九二二）以降、軍縮を反映して順次廃止されるが、軍備拡充のため昭和十一年（一九三六）から順次復活する。昭和二十年（一九四五）敗戦により解散。

「陸軍幼年学校」(34) 大越史記全書(XI二一八〇一)



和学講談所

和学講談所

江戸時代後期の幕府の教育兼調査機関。和学所ともいう。塙保己一の私塾として出発し、寛政五年（一七九三）幕府に出願して江戸麹町の裏六番町に創立。当初は寺社奉行の所管であったが、のち林大学頭の支配に定まった。文化二年（一八〇五）表六番町に移転。明治元年（一八六八）には活動を停止している。稿本類は明治政府の修史局に引継がれ、編纂事業のために集められた書籍は流出したものも多いが、その大半は内閣文庫に所蔵されている。

「和学講談所」(74)

*続蒙求 (XI-四-B-12)

万葉集 (五-C-18)

和歌山藩校

紀伊国和歌山藩徳川家の藩校。正徳三年（一七一三）藩主徳川吉宗の時、湊に講積所が開設される。享保年間（一七一六―一七三五）初頭には講堂が設置され、儒者・物読・教授の三職が置かれた。その後、講堂は荒廃するが、寛政三年（一七九一）藩主治宝が再興、規模を拡張して学習館と改称する。翌年に医学館設置。寛政五年（一七九三）江戸赤坂の藩邸内に明教館が設けられ、文化元年（一八〇四）には伊勢松坂に学問所が設置される。嘉永七年（一八五四）には江戸藩邸に国学所（古学館）が、安政三年（一八五六）には和歌山に国学所と文武場が設置される。慶応二年（一八六六）茂承により藩校改革が進められ、学習館と文武場が統合された。明治二年（一八六九）には学校と名を改め、国学寮・漢学寮・洋学寮を設置。旧蔵書の大半は和歌山大学が紀州藩文庫として所蔵している。

〔北葵文庫〕（33）

伊勢物語（三―B―a―四）

（国立国会図書館司書）

